新入園児を迎えるにあたって

平井信義

毎年のように、四月になると新入園児を迎える。そして、毎年のように「新入園児を迎えるに当って」――という文章が、いろいろな雑誌で取り上げられる。古くから先生をしておられる方々にとっては、それが慣れっこになっているかも知れないが、毎年、新鮮な気持ちで、子どもを迎える準備をしている方もあるだろう。とくに、今年新入園児を初めて受け持つという若い先生方にとっては、胸のときめきを感じ、或るいは強い不安に陥入ったり、また、とくに子どもを迎える楽しみを味うことであろう。

目の前に現れる新入園児は、それぞれの生活史を持っており、いろいろな反応を示す。母親から放り出されている時が多く、すでに独立心があり、友だちとつき合う方法も知っていて、最初の日からなれなれしく行動する子どももいるだろう。或るいは、これまで友人が与えられず、家庭の中で両親の過保護を受けて育った子どももいる。そのような子どもは、母親の手をしっかり握りしめて、なかなか園の生活に慣れないだろう。母親にしがみついて、大声で泣き叫ぶかも知れない。或るいは、緊張した顔に目を丸くして、先生の言うことを一つ一つ守ろうとする子どももいるだろう。それぞれの子どもが、それぞれの生活史を背負ってやってくるのであるから、そうした生活史にたいする理解をじゅうぶんに持っている必要がある。

どの子どもも可愛い――と、ひとは言う。可愛い子は大勢いる。しかし、正直なところ、気持ちにぴったりとしない子どももいるはずである。或るいは、どうしてこのような子どもなのだろう――と、情なく思えてくる子どももいて、その子どもや子どもを育てた親や

家庭を非難したくなるような場合が起きてくる,と思う。或る時には、にくらしくなるような子どもが入園してくるかも知れない。

保育者の気持ちにぴったりして可愛い子どもとそうでない子ども――その違いは、いったい、どこからくるのだろうか。どの子どもも可愛いと思うつもりで始めた保育であったのに、保育者の気持ちを乱す子どもがいるというのは、どういうわけであろうか。そして、どの子どもをも可愛いと思い、そして保育者の心にぴったりとくるような子どもにするには、どのようにしたらよいであろうか。

その際に、先ず考えなければならないのは、どのような子どもを「よい子」と考えていたか――ということであろう。「よい子」については、これまでの教育の中で学んできたかも知れない。そして、「よい子の見方」ができているかも知れない。しかし、その見方と自分の本当の感じ方との間に、ずれを感じている保育者もあろう。

きれいな顔立ちをして、身ぎれいにしている子どもは、魅力的である。このようなことを言うと、自分はそのような表面的な姿に牽かれるようなことはない――と立ち向かってくる保育者もあろう。かえって、身ぎれいに取り繕っている子どもは、保育しにくいものだと言う保育者もあるだろう。中には、それに反感を持つ保育者があるかも知れない。いずれにせよ、表面的な子どもの見方は危険である。それにしても、鼻をたらし、目をくしゃくしゃさせ、小ぎたない格好の子どもと、愛くるしい身ぎれいな子どもとが存在している。このことにとらわれるかどうか。とらわれるとすれば、何故なのか？

子どもの中には、素直に保育者の言うことをきく子どもが少なくないだろうが、保育者の言うことをなかなかきかない子どもがいるだろう。言うことをきかない子どもの中にも、初めから先生の言うことを無視して、好き勝手な行動をする子どももあり、また、お母さんの手からなかなか離れず、離すと泣き喚いて手に負えない状態になる子どももあろう。おそらく、先生の言うことを素直にきく子どもを、「よい子」と評価することになろう。保育しにくい子どもは、保育者の心を悩ます意味で、困った子、さらにはよくない子と感ずるかも知れない。それが正しいかどうか。これから子どもの人格を育てていく仕事が始まる。その際に、保育者の言うことを素直にきいてばかりいるようなことがあれば、自主的に行動することができないような子どもになるかも知れない。そうなれば、こうした子どもの見方に疑問を持つ必要がある。もちろん、子どもの素直な行動がよくないという意味ではない。素直であることは必要であるが、やはり、自主的な行動が育っていかなければならないし、保育者の行動に不合理があれば、それに立ち向かってくる気力のある子どもの姿も大切にしなければならない。そこに、保育のむずかしさと、おもしろさとがある。

手のかかる子どもでも、保育の日が進むに従い、園での生活に適応し、それを楽しむ子どもになってくれば、保育者にとっても保育のしがいがあったと言うべきであろう。その際、保育の技術がどの

ように用いられたか、どのような子どもが早く適応したか、保育の技術と子どもの適応との関係がどのようになっているか――こうした問題について、基本的に考えてみることは、必要である。この点で、これまでしっかりした研究が少ないだけに、大いに考えてみてほしいことである。とくに、母親の手を離さない子どもに対しては、保育の技術として、大別して二つが言われてきた。母親の附添いを認め、徐々に離していく方法と、強制的に母親から離す方法とがある。それぞれの成功例が経験的に語られてきたと思う。それらが、どの子どもにも妥当するものかどうか。どの保育者にも用いられる方法かどうか。妥当しない子どもがあれば、それは何故なのか、また、いずれかの方法で早く園になれたといっても、その後一、二年の保育の中で、何らかのよくない影響が現れてはいないか――など、研究課題はたくさんある。古い保育者も、その点の理論的解明をしていない。

二週間たち、三週間たっても、一～二か月たっても、まだ園に適応しにくい子どもがいる。無理に母親の手から離してみると、保育者の腕の中でもがき、暴れ、或るいは保育者を蹴飛ばし或るいは髪の毛をむしるなど、このような子どもに会うと、つい腹も立とうし、保育者になったことを情なく思う気持ちもわこう。しかし、このような子どもでも、根気よく努力を重ねるにつれて、一学期、二学期と、だんだんに園に適応するようになり、卒園する頃には、年令にふさわしい行動をとるようになるものである。また、そのように実現することが、保育者の大きな任務である。もし、このまま園にこなかったとしたら、小学校に入る時に、更に大きな困難を経験する子どもであったろう。むしろ、このような子どもこそ、集団生活を経験させることが大切であるはずだ。

ただし、問題は、何故集団に適応することが困難なのかを考えてみることにある。必ず浮かんでくるのは、これまでの家庭における養育の欠陥である。その欠陥をどのようにしてなおしたらよいか。つまり、家庭の協力を得て、例えば、家庭での過保護を改めたり、溺愛をなおしたりする必要が生ずる。両親または母親との面接が必要になってくるわけは、ここにある。しかし、若い保育者にとっては、そうした親との面接は、なかなか難しく思われるだろう。若いくせに家庭のデリケートなことなどがわかるものか――という目で見られるかも知れない。このような時に、相談相手になれる先輩や園長がきちっと決っていればよいが、それもなかなか実現できない現状にあるから、若い保育者はいろいろな焦りや悩みも生ずることと思う。

そのような時の面接は、あわてて両親の養育上の欠陥を指摘するようなことになりやすい。そうなると、両親との心の結びつきは欠け、かえって両親を依怙地にしてしまうことになりかねない。それは、母親として、その欠陥に気付きながらも、夫や姑との関係から、欠陥をなおすことができないでいたような例もあるからである。むしろ、母親が家庭生活の中で持っている悩みについて、とも

に考えることが必要なこととなる。悩みを訴える相手があるということは、母親の気持ちをかえ、養育態度を変えることにもなり得る。現実に、集団に適応しない子どもが保育者及び母親の目の前にいるのであるから、その現実から出発して、両者が心を合わせて問題解決に努力して欲しい。

これまで、保育しにくい子どもがあると、その母親を非難したり、家庭の悪口を言いたくなる傾向が多かったと思う。そして、子どもの問題の解決に向かって、努力する態勢をきちっととることが少なかったのではないかと思う。それは、園それ自体の機構にもよるが、保育者の養成過程にも問題があると思うが、やはり、保育者の権威というものが引っかかってくるのではないかと思われる。すなわち、保育者の一年生・二年生であるのに、何とか親たちの前に権威を示そうとする気持ちが動き出して、それが邪魔をしていたようなことはないかどうか。その点が、私の思い過ごしであれば幸いである。

権威というものは、自分でつけていこうとしても、或るいはつけようとすればするほど、妙なもの、形式的なものになりやすい。やはり、保育について研究を重ね、反省を繰り返している中に、自然その人の身についてくるものである。いつの間にか、子どもの両親が、尊敬し信頼する保育者になっているということである。

この点では、子どもに対しても同様である。子どもを自分の思い通りに指導するということよりも、子どもから教えられることが多いことに気付くことが権威を身につけることになる。子どもから教えられることに喜びを見出した保育者は、子どもが言ったり行動したりすることに耳目を開き、保育の中で、感動の多い毎日を送っている。或るいは、子どもが言ったり行動したりすることを大切にし、その中から子どもが伸びていく可能性をたくさんに見出している。そして、決して「あの子は、そのくらいのものだ」と見限ったり、あきらめたりしない。それが子どもから慕われ、信頼され、権威ある存在として映る唯一の方法ではないかと思う。

いずれにせよ、新入園児を迎えての一か月は、毎日毎日が苦労の多い中に、飛ぶように過ぎていくことと思う。その際に、園に適応しにくい子どもを持ったということは、更に苦労を多くするものとなろう。しかし、そうした子どもが適応できるよう、保育の中で努力を重ねることが、実は保育者の人格をも高めていることになる。保育しにくい子どもに対し、大いに感謝しなければならないことと思う。

保育という仕事は、保育者の人格が高まり、保育の技術が進むにつれて、子どもたち一人ひとりとの結びつきも濃くなり、子どもたち集団の動きとも一体となって、一つの芸術といってもよいような保育にまで展開する。その楽しみは、保育という仕事を生涯の仕事と感ずるほど魅力的なものになるだろう。